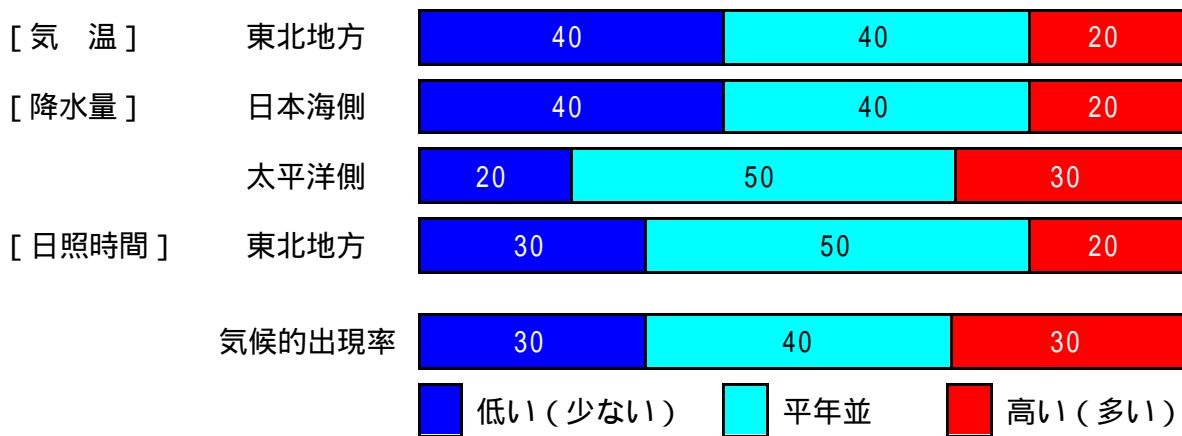


東北地方 1か月予報の解説(予報期間:7月10日~8月9日)

平成11年7月9日 仙台管区気象台

1. 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)



[気温]: 東北地方は「平年並」か「低い」可能性が大きく、その確率はそれぞれ40%です。
「高い」確率は20%と小さい。

[降水量]: 日本海側は「平年並」か「少ない」可能性が大きく、その確率はそれぞれ40%です。「多い」確率は20%と小さい。

太平洋側は「平年並」の可能性が大きく、その確率は50%です。次に大きい確率は「多い」で30%です。「少ない」確率は20%と小さい。

[日照時間]: 東北地方は「平年並」の可能性が大きく、その確率は50%です。次に大きい確率は「少ない」で30%です。「多い」確率は20%と小さい。

2. 予想される天候の特徴(もっとも高い確率の予報が実現した場合の天候は以下の通りです。)

向こう1か月

東北地方では、前半を中心に梅雨前線の活動が不活発で、北からの高気圧に覆われることが多いため、気温はやや低めで経過し、太平洋側を中心に曇りの日が多くなる見込みです。

平均気温は「平年並」か「低い」でしょう。(平年の晴れ日数は約14日です。)

各予報期間の天候の特徴

1週目…………… 高気圧が北に偏って張り出すため、湿った東風が入る太平洋側では、曇り(7月10日~7月16日)の日が多いでしょう。日本海側では北部を中心に晴れる日が多い見込みです。平均気温は平年並の見込みです。
(平年の晴れ日数は約3日です。詳細は週間天気予報を参照して下さい。)

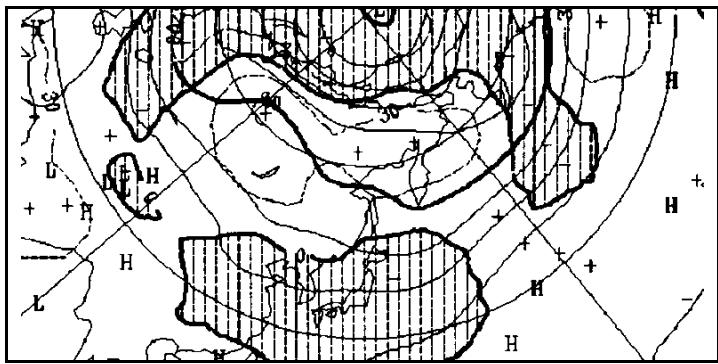
2週目…………… 冷たい高気圧に覆われ、太平洋側では晴れる日が多いでしょう。日本海側(7月17日~7月23日)では、上空の寒気の影響で曇りの日が多いでしょう。

平均気温は低い見込みです。(平年の晴れ日数は約3日です。)

3~4週目…………… オホーツク海高気圧の影響で、太平洋側では平年に比べ曇りや雨の日が多く、日本海側では平年同様晴れる日が多いでしょう。

平均気温は平年並の見込みです。(平年の晴れ日数は約8日です。)

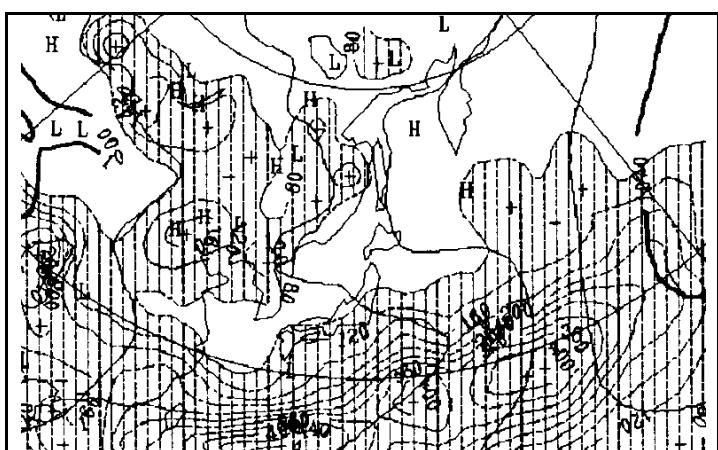
予想される天候に関する循環場の特徴（アンサンブル平均天気図）



・500hPa高度・偏差

月平均では、日本付近は広く負偏差に覆われている。高緯度では正偏差で、オホーツク海には気圧の尾根がある。

2週目（各週の図略）は、極東域が広く谷場となり負偏差。気圧の谷の軸は東海上にあり東谷パターンで寒気が入りやすい。3~4週目は、日本付近に弱い逆位相ある。



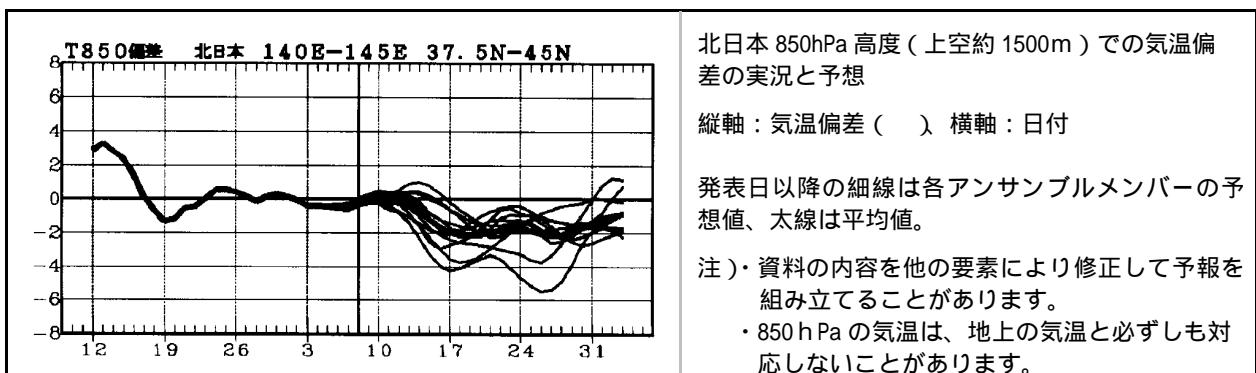
・地上気圧と降水量

月平均では、オホーツク海付近の高圧部が期間を通じてはっきりしている。日本付近には、強い凝結域はかかっていない。30°N以南で対流性と見られる強い凝結域があるが、1週目の熱帯擾乱による寄与が大きく不確定。

2週目以降の地上の降水量（図略）は、日本の南に広がり、日本付近でまとまったものは見られない。また、1週目と3~4週目にはオホーツク海高気圧が顕著である。

3. 北日本850hPaの気温偏差の実況と各アンサンブルメンバーの予想

北日本850hPaの気温は、アンサンブルメンバーの平均でみると1週目後半から平年を下回り、その後低温傾向が持続する。2週目以降はアンサンブルメンバーのバラツキはやや大きいが、低温傾向は同様。

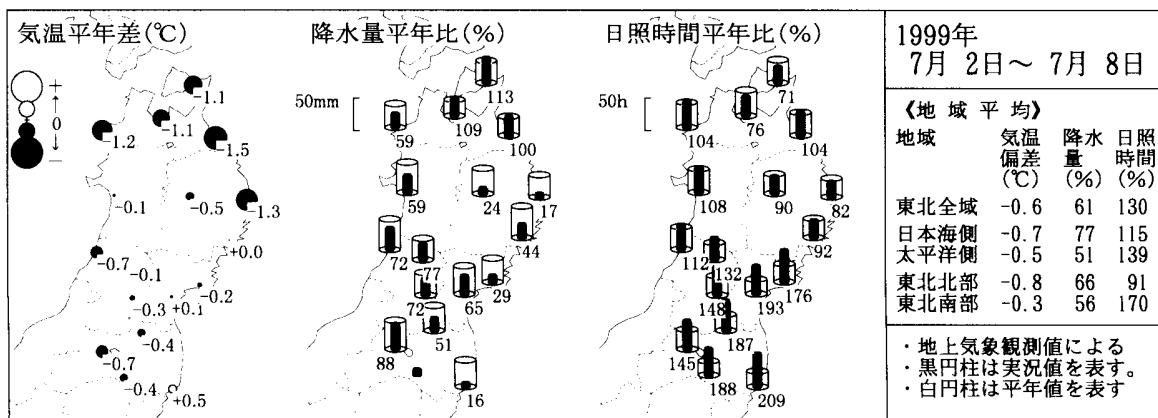


注：1か月予報では、よく似た初期値から出発した10個の数値予報結果のバラツキ具合から予報の信頼度や確率を計算します（この手法をアンサンブル予報といい、10個の予報結果のそれをアンサンブルメンバーといいます）。一般に予報結果がばらつかないほど、大気の流れが予測しやすい状態にあると考えられます。このような状態の時は、信頼度が高くなり、確率の大きな予報を出すことができます。

4. 最近1週間(7月2日~7月8日)の天候の経過

3~4日にかけて梅雨前線の影響で全般に雨となった。その後は、オホーツク海高気圧に覆われ、南部では晴れの日が多くなった。北部では、北からの寒気の影響を受け、南部に比べると気温が低く、日照時間も少なかった。

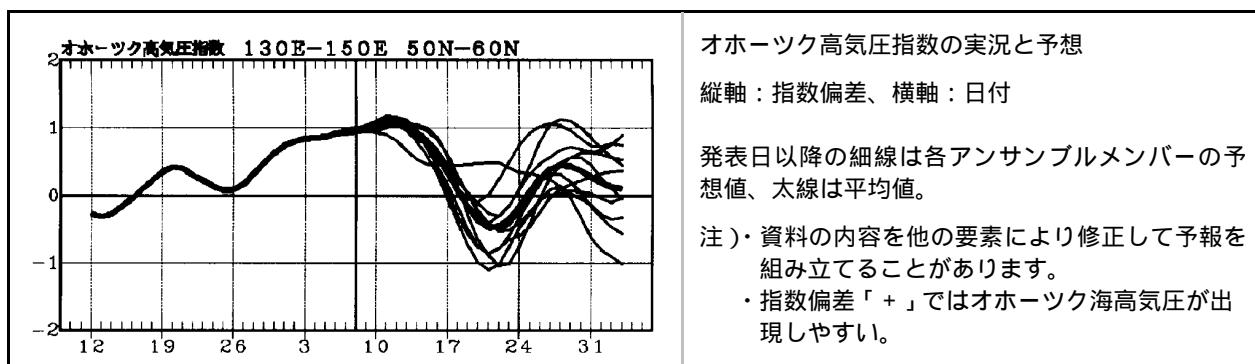
気温は平年を下回った。降水量は平年を下回った。日照時間は南部では平年を上回ったが、北部では平年を下回った。



最近1週間の平均気温、降水量及び日照時間の平年差(比)

5. その他

オホーツク高気圧指数は、アンサンブルメンバーの平均でみると1週目に高極になった後、2週目に下降し平年並になる。その後再び上昇し高めで経過する。しかし、2週目後半からはバラツキが大きくなり、信頼度は小さい。



梅雨は春から夏に移行する過程で、その前後の時期と比べて雨が多くなり、日照が少なくなる季節現象です。季節の変化は、ある日を境に明瞭にその季節に入り又は終わることではなく、双方の季節が交互に現れる遷移期間を経て変化しています。このため、梅雨の入り・明けの時期を遷移期間(平均的に5日間程度)の概ね中日をもって「日頃」と表現しています。

この時期、日本付近は梅雨前線や低気圧の影響を受けやすく、年による違いはありますが、特に梅雨末期には南から暖かく湿った空気が流れ込んで梅雨前線の活動が活発となり、大雨となりやすいことから、土砂災害等防災上の注意が必要な季節です。

梅雨入り・明けの時期

	今年の梅雨入り	平年の梅雨入り	昨年の梅雨入り	平年の梅雨明け	昨年の梅雨明け
東北南部	6月7日頃	6月12日頃	6月3日頃	7月23日頃	特定しない
東北北部	6月7日頃	6月14日頃	6月3日頃	7月26日頃	特定しない